

弘前大学理工学部後援会報

第 7 号

発行日 平成23年2月28日
 発行者 〒036-8561 弘前市文京町3
 弘前大学理工学部後援会(理工学部内)
 印刷所 (株) 笹 軽印刷
 連絡先 岡本 浩 (理事・教員)
 TEL : 0172-39-3636

弘前大学理工学部 後援会事業について

会長
三 浦 賢 二



東北新幹線が昨年十二月やっと新青森まで開業。そうしての新しい年は厳しい雪の季節です。タートしましただが、雪の下からは次の新しい芽が出、成長してゆく姿が期待・想像されます。

先般、使用済みパソコン等から金、プラチナ、パラジウム等の貴金属を「ホタテウロ」が効率的に吸着するという新聞記事を目にしました。『理』がエコがらみで人間社会に寄与するということに私は素晴らしいと感じました。まさに理学と工学の融合といえるでしょう。

当後援会の目的は弘前大学理工学部及び大学院理工学研究科の教育・研究・地域貢献活動等への助成となっており、平成十六年に設立されて以来、学生諸君の学会での研究発表や就職支援事業等に取り組んでいる訳ですが、研究は概して地道な継続が必要なもの、その支援・助成は当然継続性が問われると思います。と同時に工夫や発想の転換も要求されるでしょう。

そして当後援会に特別会計・学部特別事業支援費が設定されて二年目、教育相談(チューター制度)支援も動き出しています。特別会員の理事の先生方ともさらに協議を重ね、より効果的後援事業を展開させたいという理事

会・総会の意見に会長として感謝しているところです。

この会報に各学科それぞれの専門性に応じた研究発表紹介がどんどん掲載されることを全会員で期待し喜びたいと思います。

雪片付けして思うことですが・・・ただ積み重ねても雪は崩れます。ちよつとスコップを雪山の側面に押し当ててちよつと間を置くとくつき上手に積み上げることが出来ます。温度によるようですが雪は接着性が強く、固化するので雪像を作ることができ、雪祭りなど雪国ならではの冬の喜びも生れるのでしょうか。

また、雪の下で地熱利用も楽しい雪処理でしょうか。住宅前の側溝に雪を押し込んでやると太陽熱よりも速く雪は減ります。手をかけてやる必要はありませんが、冬場の運動不足の解消法にもなるでしょうか。雪原の中に通る道に、風が吹き抜けるように設計された防雪柵は、私が学生の頃、有志の先生方が取り組まれていた地吹雪研究の成果だと聞いています。

繰り返しになりますが、昨今は私の学生時代とは違い、学生諸君が学会で研究発表しています。大学院生のみならず、学部生にも研究発表補助を広げることになりました。学生諸君には、先生方から探究の喜びを学び、各学科の専門性を生かし、未来を拓くチャレンジをして欲しいと思います。

(蛇足ですが) 四〇五年も咲いたことがなかった我が家の鉢植え「ブーゲ

ンベリア」が突然咲き出してなんか嬉しい気分、(当時は) 文理学部理学科物理学専攻の仲間有志と久しぶりに懇親会をしました。懐かしく学生時代を振り返っては、お互い「昔の考え方と基本的には今も変わらないね」などと話に花を咲かせていました。



理工学部後援会の役割

元特別会員理事(教員)

倉 坪 茂 彦

二〇〇四年四月からの大学法人化を迎え、その半年前から後援会設立の準備が進められていました。その中心になって尽力された須藤新一教授が副学長に就任されるという事態となり、その後を引き継いで理事になったのが二〇〇四年の春でした。それから四年間、倉倉会長を支えて総務担当理事を務めました。その設立目的は、「理工学部

及び研究科の教育、研究、地域貢献活動、就職活動に助成し、学部及び研究科と在学生の保護者並びに社会との連携を図る」です。四年間の任期の中で印象に残っている事業は、二〇〇三年から実施した「保護者懇談会」と「合同企業説明会」でした。ともに後援会発足の半年前に全学に先駆けて理工学部独自に行ったものです。とくに前者は、保護者との連携があれば防げたとの反省すべき学科内の事例をもとに、たとえ学部で実施できなくとも私どもの学科(当時数理システム科学科)だけでも実施すべく準備を整えていたものでした。後者については、その当時就職氷河期(一九九三年から二〇〇五年)の終焉期で求人倍率も徐々に向上きかけていた頃であります。が、就職に強い学部を目指すべく開催したものです。「企業説明会」は個々の企業が開催するものとは異なり、多数の企業が同一会場にブースをもうけて説明に当たるといいうものです。現在では大学が主催する形で大規模に進化しています。昨年は二日間、午後の部と午前の部、計四つの時間帯にそれぞれ五十社、計二百社から担当者を派遣していただいていた行いました。このような積極的対応が効を奏し、学部・大学院とも一〇〇%近い就職率を誇って参りましたが、二〇〇八年秋のサブプライムローン問題を引き金とする景気悪化のあおりを受け、前回の氷河期を超える就職困難期を迎えております。このような状況はここしばらく続きそうですが、後援会と学部・大学が手を携えて、学力アップを図り、己を知り、企業を見る目を養う力を育めるような努力が必要だと思ひます。一方、ご家庭内でも、長期休暇で帰郷した折りなど話題にさせていただくことも大事だと思います。

保護者の皆様には、今後とも理工学部後援会に強力なご支援をお願い致します。

学生教育相談室

学生教育相談室長(教員) 吉岡 良雄

最近、大学事情をよく表した単行本が立て続けに出版されました。これらを読むと共通して、今の大学生は「本が読めない」や「文章が書けない」等といった「基礎学力がない」ことが述べられています。また、企業からの求人面談においても、「今の大学卒業者は基礎学力に欠ける」とよく言われます。

「基礎学力」とは、勉強の仕方、自主的に・継続的に学習する能力、文章の読み・書き・まとめる能力、コミュニケーション能力、規則正しい生活など、その人の「姿勢と習慣」のことです。かつての大学はこれらの「基礎学力」があった上で「基礎知識」とその「応用力」を学ぶところでした。この前提のもとでもし「基礎学力」が欠けていたら大学での講義内容が理解できず、果ては退学することにもなりかねません。また、授業科目の大半が「可」で卒業できたとしても、「基礎学力」を欠いたまま社会に出ることになり、たとえ就職できたとしても、数ヶ月や数年で辞めることになるかも知れません。

ところが最近では日本全国において、かなりの数の学生が「基礎学力」を欠いたまま入学してきていると言われるようになり、地方国立大学でも、前述の「基礎学力」を身につけさせるような仕組みが必要になってきました。「基礎ゼミ」科目の導入やクラス担任制度などもその例です。また、多くの大学で実施している「学生教育相談室」も、この仕組みの一つです。弘前大学理工学部でも理工学部後援会のご支援をいただき、今年度からこのような「学生教育相談室」を開設しました。教員と大学院生のチューターが相談員となっており、ただちに相談を受けた場合には、十一時～十三時の時間帯に直接学生教育相談室にお越しいただくとチューターが親

身に correspond させていただくシステムと致しました。最後に、お子様に「基礎学力が身に付いているかどうか」につきましては、毎期お送りしております成績表が一つの目安となります。総単位数の約半分以上が「優および秀」、およびすべての実験科目や演習科目の単位が「優および秀」であれば概ね良好といえます。逆に、いくつも再履修がある場合には、「基礎学力」が欠けているのかもしれませんが、また、「基礎学力」は、いわゆる、規則正しい生活やマナーなどにも密接に関係しています。もしこれらのことにお心当たりがございましたら、お子様に「学生教育相談室」に行くように勧めてみてください。他人(先輩)から話を聞くことによって、新たな解決策が生まれるかもしれません。



学生教育相談室の相談風景(上)と
大学院生チューターが作製したポスター(右)

札幌地区保護者懇談会の報告

理工学部学務主任(教員) 伊藤 昭彦

昨年九月二十五日(土)の午後から、TKP札幌カンファレンスセンターきょうさいサロンの会場に保護者懇談会が開催されました。札幌会場での開催は初の試みで、果たして保護者の方にお集まりいただけるのか、期待と不安が半ばする状況で踏み出したのですが、事前申し込みで百三名、当日は夫婦で来られた方もあり、百三十名を超える盛況振りででした。理工学部に入學している学生の約三割が北海道出身であることを考えると、お初であることを差し引いても、札幌会場での開催に関心が高かったように思われます。

当日は、研究科長、副研究科長、各学科長、学務主任、入試主任、就職対策委員長に、個人面談の多い学科から二名の先生が加わりました。また、事前準備や会場設定に総務と教務の職員の協力がありました。折りしも懇談会開催の少し前に、文科省の大学評価結果が新聞に公表されたこともあり、その内容についての説明が研究科長からなされました。保護者にとつてみれば大学の順位そのものより、学業や就職が重要で、その点弘前大学理工学部は全国的に見ても高いレベルにあり、



十分な説明がなされたと思います。ただ、会場が狭かったことや、プロジェクトの画面が見づらかったこと、就職関連資料をいただけないか、などの意見や要望もあり、今後の検討事項として次回につなげていければと思います。全体説明の後に個人面談が行われましたが、どの学科も時間まで対応に追われていました。

翌日二十六日の午前中に、進学相談会が開催されました。高校生ならびに保護者らあわせて約六十名の参加があり、こちらも会場はにぎやかでした。今回札幌会場での保護者懇談会が開催できたのは、理工学部後援会の支援の賜物です。ここに感謝申し上げるとともに、今後ともご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

学会等研究発表補助事業

理工学部後援会では大学院生が学会や国際会議の場で研究発表を行う際に旅費の補助を行っています(会員限定)。今年度からは会務報告の通り、学部の四年生についても補助が行えるようになり、活発な研究発表が行われました。平成二十二年度の支援件数は以下の通りです。

- ・ 国内旅費の補助 二十件
- ・ 国外旅費の補助 六件

地球環境学科の学生野外研修事業

特別会員理事・地球環境学科(教員) 柴 正敏

地球の環境の成り立ちを理解する近道は、実際に野外に出て観察し考えることです。地球環境学科では、三内丸山遺跡や青森県立郷土館の見学(一年生)、深浦町での化石観察や津波防潮堤の見学(二年生)及び浅瀬石ダムや田舎館村垂柳遺跡の見学(三年生)を実施しています。一年生は、三内丸山遺跡で、千五百年間続いた縄文人の生活の記録を遺構や土器・

石器等を通して実感し、青森県立郷土館では青森県の自然と文化を総合的に学びます。二年生は深浦町の大戸瀬海岸で大型有孔虫などを観察し、当時ここが熱帯の浅い海の底であったことを学びます(写真)。三年生は、災害(特に水害)をテーマにダムと洪水による土砂でパツクされた弥生時代の日本最北の水田跡を発掘・展示している垂柳遺跡を見学します。弥生時代の水田跡地が再び水田として利用されるようになるのは平安時代になってからのことで、度重なる洪水が長い間、土地利用に影響を及ぼしたことが推察されています。

さて、現地までの交通手段は借り上げバスを利用しました。バスの借り上げ代を理工学部後援会に援助して頂き、安全かつ効率よく研修を実施しています。これら野外研修は、学生さんたちの勉強に役に立つだけでなく、コミュニケーションしやすい雰囲気を作り出すことにも大いに有効でした。



爽やかな潮風を受けながら、熱心に化石を観察する学生さんたち。
深浦町・大戸瀬の海岸にて。(平成20年10月3日実施)

弘前大学理工学部後援会
役員等一覧 (2010.6.9現在)

- 会長 三浦賢二
- 副会長 日野了一
- 理事
- ・通常会員
 - 谷川 浩二 (数理科学科)
 - 齋藤 哲 (数理科学科)
 - 石岡 誠 (物理科学科)
 - 土岐 直幸 (物理科学科)
 - 成田 孝文 (物質創成化学科)
 - 日野 了一 (地球環境学科)
 - 柿崎 均 (地球環境学科)
 - 新谷 泰造 (地球環境学科)
 - 大高 正夫 (電子情報工学科)
 - 佐藤 武英 (電子情報工学科)
 - 佐々木 一 (知能機械工学科)
 - 山内 敏春 (知能機械工学科)
 - ・特別会員
 - 柴 正敏 (弘前大学大学院理工学研究科教授)
 - 岡本 浩 (弘前大学大学院理工学研究科教授)
 - 福田 眞 (弘前大学大学院理工学研究科教授)
 - ・賛助会員
 - 三浦 賢二 (弘前大学文理学部昭和40年3月卒業生)
- 監査 奈良 昌孝 (電子情報工学科)
兜森 博道 (物質創成化学科)
- 顧問 稲村 隆夫 (弘前大学大学院理工学研究科長・理工学部長)
(敬称略)

定例の理事会と総会がそれぞれ六月九日と十月二十二日に開催されました。理事会では平成二十一年度決算案、特別事業支援費、大学院研究発表補助金応募要領、平成二十二年予算案について審議が行われました。研究発表補助金については学部の四年生に対して補助が行えるようにするための応募要領の

理工学部後援会 第7回総会

会務報告(理事会、第七回総会)

改訂が承認されました。総会においては同様に平成二十一年度決算、特別事業支援費、平成二十二年事業計画と予算について審議が行われ、承認されました。なお、今回の総会では会員の皆様から、より積極的に学生のための事業を行うよう要望があったほか、資金の運用方法に関することなど、活発なご意見・御討論を頂きました。

理事会では総会で提起されたご意見を踏まえ、平成二十三年度から新たな施策・運用を開始すべく、討論を行っております。今後も皆様から積極的なご意見を頂戴し、より良い活動を行っていきたく存じます。

平成21年度 弘前大学理工学部後援会決算書

平成22年3月31日 (円)

◆一般会計		金額	摘要
収入の部	繰越金	577,466	平成20年度より
	会費	3,179,000	新入生(21年度) 85人 1,450,000円 新入生(22年度) 57人 1,130,000円 在学生 31人 565,000円
	雑入	288	預金利息
	合計	3,756,754	
支出の部	教育・研究支援費	1,758,780	大学院生研究発表補助(723,000) ・前期申請9人(424,400), 後期申請7人(298,600) ・学科学外研修旅行補助4件(223,255) ・電子情報工学科「弘前工業・体験授業」のTA謝金(7,000) ・物理科学科「第12回 XAFS 討論会運営補助学生謝金」(184,000) ・知能機械工学科パンフレット作成(233,940) 学部事業補助(387,585) ・理工学部保護者懇談会補助(144,585)・「楽しい科学」[サイエンスへの招待]学生補助(223,000) ・弘前大学と八戸高専のシース提案会補助(20,000)
	就職対策支援費	148,420	就職ガイダンス(OG・企業人講演)2件
	卒業・修了祝賀会費	24,000	退職教員花束・記念品代(10,000), 弘大津軽三味線演奏謝金(14,000)
	印刷費	289,800	会報第6号(2,000部)(273,000), 後援会払込取扱票印刷(16,800)
	通信・運搬費	85,010	加入案内送料(研究科新入生)(8,620), 理事会開催案内送料等(2,390) 加入案内送料(在学生未加入者)(74,000)
	会議費	7,800	役員交通費等
	事務費	180,000	名簿整理及び会費払込案内ほか事務処理謝金
	備品・消耗品費	16,838	プリンタラベル, 封筒等
	振替払込料	21,080	会費払込手数料(190人)
	積立金	500,000	特別会計積立金へ
	予備費	0	
	合計	3,031,728	
収入決算額 3,756,754円 - 支出決算額 3,031,728円 = 725,026円を次年度へ繰り越す。			

◆特別会計		金額	備考
収入の部	繰越金	9,700,000	平成20年度より
	積立金	500,000	一般会計より
	雑入	0	貯金利息
	合計	10,200,000	
支出の部	学部特別事業支援費	0	
	予備費	0	
	合計	0	
収入決算額 10,200,000円 - 支出決算額 0円 = 10,200,000円を次年度へ繰り越す。			

平成22年度 弘前大学理工学部後援会予算書

平成22年4月1日 (円)

◆一般会計		金額	備考
収入の部	繰越金	725,026	平成21年度より
	会費	3,235,000	新入生(22年度) 88人 1,495,000 新入生(23年度) 55人 1,100,000 在学生 30人 600,000 教職員 20人 40,000
	雑入	500	預金利息
	合計	3,960,526	
支出の部	教育・研究支援費	2,500,000	大学院生学会等研究発表補助(1,000,000) ・学科学外実地見学旅行補助 ・県内高校向け体験授業補助等 学部事業補助(1,000,000) ・理工学部保護者懇談会補助(理工学部会場, 札幌会場)・「楽しい科学」[サイエンスへの招待]学生補助等
	就職対策支援費	100,000	就職ガイダンス補助, インターンシップ旅費補助
	卒業・修了祝賀会費	100,000	理工学部同窓会と共催
	印刷費	300,000	会報(140×2,000部), 加入案内等(120×1,000部)
	通信・運搬費	140,000	加入案内送料等(140×1,000人)
	会議費	30,000	役員交通費等
	事務費	180,000	名簿整理及び会費払込案内ほか事務処理謝金
	備品・消耗品費	100,000	プリンタラベル, コピー用紙等
	振替払込料	24,000	会費払込手数料(120×200人)
	積立金	0	特別会計積立金へ
	予備費	486,526	
	合計	3,960,526	

◆特別会計		金額	備考
収入の部	繰越金	10,200,000	平成21年度より
	積立金	0	一般会計より
	雑入	0	貯金利息
	合計	10,200,000	
支出の部	学部特別事業支援費	300,000	学生教育相談室チューター謝金補助
	予備費	6,700,000	
	合計	3,200,000	
収入決算額 10,200,000円 - 支出決算額 3,200,000円 = 7,000,000円を次年度へ繰り越す。			

編集後記

今回の会報は、会員の皆様並びに新入生の保証人の皆様に理工学部後援会(弘前大学後援会とは別組織です)の具体的な活動をご紹介するための特集を組みました。なお、平成二十三年度からは学部一年生から大学院生までを対象とした施策(会員限定)として、「頑張っている学生を応援するための補助」等を検討しております。これからも理工学部後援会へのご支援の程、よろしく願ひ申し上げます。(特別会員理事(教員) 岡本浩)